

生存の軌跡

ーオオカミからのメッセージー

過去に於いて幾つかの文面を発表して参りましたが、行なわれた二ホンオオカミフォーラムのレジュメであったり、商業ベースの中紙面が限られ大幅に制約される場合だったりで、皆さんの眼に触れる機会が少ない状態でした。

2002 年のフォーラムを 110 ページにわたり文字起こした、森田氏の熱意に触発されての事では有りますが、今迄発表した文面を、思い切ってここに再掲載する事に致しました。

文面の全てがノンフィクションで、自ら足を運んで得た情報、自然と対話した中での出来事ですが、昔を辿った話の中に思い違いがあるかも知れません。

それらを理解戴いた中、ご笑覧願えれば幸いです。

2013.初夏

八木 博

目 次

1.生存の軌跡				
出会い	3	～	4	P
秩父野犬	5	～	8	P
妙法ヶ岳	9	～	11	P
我が国固有の動物であるニホンオオカミ			12	P
新たなる遭遇を求めて	13	～	14	P
2.ニホンオオカミ探放記	15	～	18	P
3.オカタの山ノ神	19	～	23	P
4.秩父の民家に残されたニホンオオカミの毛皮	24	～	27	P
5.雲取り林道、ごもっとも様の日	28	～	29	P
6.神犬産立	30	～	34	P
7.ニホンオオカミの分類的位置付け			35	P
8.奇怪なる私のヤマイヌ 今泉吉典	36	～	37	P
9.あとがきにかえて	38	～	40	P
八木 博のプロフィール	41	～	42	P

生存の軌跡

出会い

宇宙船アポロの飛行士が御伽の世界でしかなかった月面に人類として始めて足跡を刻んだ夏。新潟長野県境に位置する苗場山頂（2145m）の山小屋遊仙閣の番人をしていた私は、神秘の世界から目覚めさせられた月の光に誘われたかの如く、山腹の和田小屋から30kgの米俵を背負い子に積んで深夜の山道を山頂へと向かっていた。“お花畑を載せた山”のキャッチコピーがぴったりする様な山頂のその小屋には、私の高校山岳部の後輩たちが居候としてたむろしていた。神楽が峯（2029m）から登山口の三俣集落までのスロープは山スキーのメッカとして多くの山人達に知られるところで有ったし、春は小屋に泊り切れないほどのスキーヤーでごった返してもいた。そのスロープにスキー場としての商品価値を見出した観光会社が中腹の和田小屋と山頂小屋遊仙閣を入手し、監督官庁から

天下りの役人を迎え入れ開発に着手していた時期だった。山小屋の経営とは全く違った目的での入手であった為採算度外視的に管理する事が黙認されていて、後輩の居候達が立ち代り出入りしていた。

和田小屋は昭和初期慈恵医大のヒュッテとして創られたのが始まりで、管理人であった和田喜太郎翁が譲り受けた後、自らの大工としての技で建て増しを重ねて行って 350 人収容の大きな小屋へと育てあげた。

一方遊仙閣は、鈴木牧之の北越雪譜に

苗場登山紀行が記されていて、行者道を苦心して登り山頂の小屋に泊ったと記されているので、もしかしてその小屋が遊仙閣の始まりかも知れないが、修験行者で有った雲尾東岳氏が山頂で行をする為に築いたのが始まりと聞いている。私は苗場山同様遊仙閣と云う名前が非常に好きだった。山頂に果てしなく広がる湿原とお花畑。富士山、北アルプス、妙高連山、越後三山から連なる新潟群馬県境の山々の大パノラマ。そんな山頂での行は仙人が遊ぶが如くで、本当に行で有り得たのか今でも疑問の有るところなのだ。遊仙が如く山頂で、煩惱との闘いがもしかして唯一の行で有ったのでは無いかとさえ思っていた。雲尾氏とは後年、ニホンオオカミの標本を研究する中で縁が出来るのだが、その当時一介の小屋番で有った私とは程遠い存在で有った。

後輩達には歩荷、小屋の掃除、山道の整備、高山植物の監視等色々手伝って貰っていたが、数日後の団体さん宿泊の際に米が不足するのではないかと不安になり、其れを補う為の真夜中の歩荷であった。その前年からスキー場開発と並行して、青森から来た山人達がブナ林の伐採をしていたのだが、スキーに適したスロープだけの伐採で、ブナが鬱蒼と茂



中学3年の夏休み

最初に登った山が苗場山だった

る登山道は雨具無しでもさほど不便を感じずに歩く事が出来ていた。そんな林の中の登山道でも、その日が特別な日だったのか月の光だけで充分山歩きが出来る不思議と思える夜だった。小屋を出て 30 分位歩いただろうか……積荷から肩休みが出来そうな格好な場所を見つけた私と後輩の同行者が一息付いて間も無く、私達の耳元に山からのコールが届いた。そのコールは、つい一週間程前人類が発した最先端の科学的なコールからは全く逆行したものだった。昼からの疲れで虚ろになっていたのだろうか、二声までは夢の中の出来事の様に感じていた私だったが、三声目の咆哮を確かな意識の中で確認すると急に恐ろしくなってきた、寝てしまった同行者をたたき起こし荷物をそのままに、今来た道を素っ飛んで下った。その咆哮は初めて聞いた鳴き声では無く、其れゆえ其処に留まる事が怖かったので有る。テレビラジオで御馴染みと言っても過言ではない動物の鳴き声そのまま、周りの環境がより一層恐ろしさを増長させていた。

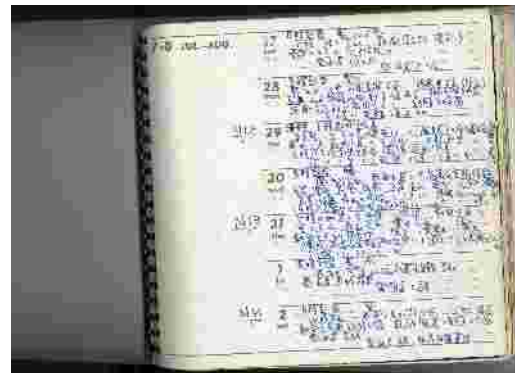
翌朝、宿泊客を送り出した後の朝食の団欒の中に姿を現した私達を見て、人生経験豊富な和田小屋の番人達は一樣に驚いたのだが、真剣に獣の咆哮の話はする事が出来なかった。もしかして一言二言話したが、馬鹿にされて口をつぐんでしまったのかも知れない。正直言ってその朝食の時の数十分が全く記憶に無い。雑誌の取材でノンフィクション作家に話すまで三十年近く、妻以外の誰にも話さなかったのは今考えてみると、和田小屋の朝の事がトラウマになっていたのかも知れない。

当時私は山日記に毎日の出来事を記していたが、その日(1969 年 7 月 29 日)は詳細無しに“獣の遠吠え”の 5 文字で充分だった。その一件さえなければ、山頂の小屋まで米を運んだ私達はとんぼ返りで湯沢の町まで買出しに出かける予定でいたし、それが苦になる事でも無く、何より若く健康で有った。

乗るはずだった 10 時 30 分発湯沢行きのバスに、登山口停留所で異変が起こった事を知らせてくれたのは、夕方近く小屋に着いた登山者だった。

発車を待っていた 20 名近くの乗客を乗せたままサイドブレーキの故障が何かで、10 数メートル下の谷底にバスが転落してしまった……。

20 年近い私の人生の中で此れ程までにドラマチックな日はかつてなかったし、これからは有るとは思えない事を考えると、5 文字の記載で充分だった。そして何より遠吠えの主との浅からぬ因縁を感じずに居られなかった。有り体に言うならば、私は遠吠えの主から求められているのでは無いかとさえ感じ、歳を重ねる毎にその思いは深くなって行った。



獣の咆哮を聞き記した山日記

秩 父 野 犬

こまめに拾い集めた情報が花開いたのは、子育ても終って精神的にも時間的にも余裕が出来、ニホンオオカミと真剣に向き合おうと考え始めた頃だった。1996年10月14日、日没間近の秩父山中。

霧雨の落ちる、人里からさほど離れていない林道を、野生動物との出会いを期待しつつゆっくり車を走らせていた私の前に、突然事も有ろうに、長年探し求めていた動物が現れたのである。

舗装されてはいたものの狭い林道の、ヘアピンカーブを幾つか抜けて、ガードさえない細いコンクリートの橋を過ぎて、ほっと一息ついた私の車の前に、・・・今渡った沢の少しばかり下流200メートル位だったか・・・。左側は30分前に越えてきた峠の近くを源頭とする幅5メートル位の沢が続き、右側は今走っている林道を無理矢理作った為の崖が続く、対向車が上って来ないことを祈りながらの走行。初めて



秩父野犬

すれ違いのスペースがある地点にさしかかったとき、沢から何か動物が上がってきて私の車の進行を妨げるように立ち止まった。沢からの途中で漠然と見た時、見たことのある動物だなとは思ったが、はっきりしなかった。そして逃げるともなく車のボンネット越しに私の顔をみつめている動物の姿を観察しながら、動揺を抑えきれなくなって居た。”まさか” “まさか”の動物が目の前に現れたのである。私はその動物の全てを記憶の中に入れようと必死になった。1分近く？もっと多くの時間かも知れなかったが、納得するだけの時間をその動物から貰う事に成功した私は、1人の記憶より2人の方がより正確に把握出来る・・・、見落とした所があるかも知れない・・・、師と慕う和歌山の井上百合子さんに記憶を共有してもらわなければ・・・、そんな思考回路の中、携帯電話を取り出していた。しかし2回架けても交信出来ない現実、今いるところは山の中で、全てを私一人でやらなければ駄目なんだと気づき、次は何をすべきか逃げようともしない動物を前に考えた。私は山に入るときは300ミリの望遠を、頭骨標本等の調査には50ミリの接写用のレンズをとりつけたカメラを助手席か手に届くところに置いているのだが、今日に限ってその用意がなかった。

1969年の夏苗場山中でその咆哮を聞いて以来、生存の証を求めて数限りなく山中に分け入り、そして多くの人の証言に耳を傾けてきた。しかし全ての証言者の共通項は、言葉でしか伝えられないということであった。

とりあえず、今写真撮影の他に何が出来るかを考えた私は、ふと悪魔の囁きを耳にしてしまった。ハンドルを握る私の目の前で動こうとしない動物を・・・。右足に思い切って力を込めてアクセルを踏んで・・・。一頭の死と引き替えに生存の証明がなされればこれを契機に種の維持が出来るのだから・・・。右足下に力を込めようかどうか迷っていたとき、

脳裏に浮かんだのはほんの数日前突然逝ってしまった愛犬の姿だった。苦しみながら私の腕の中で、何かを訴えようと必死の眼差しだった愛犬の姿だった。自分の欲望で未だ幼さが残る目の前の動物をひき殺すなんて、とても出来ることではなかった。最高で最悪な手段を自ら放棄した私は、残された最後の手段である写真撮影をすべく、動物とのアイコンタクトを続けながら運転席のドア～を静かに開けて、霧雨の中を後ろの荷台に移動した。時間にしてどの位だったのだろうか、動こうとしない動物の特徴を頭の中に刻み込んで、写真を撮るべくカメラのセットを終えて、眼を元に戻した時在るべき動物の姿は視界から消えていた。数分後1台の車が近付き、その運転手から今来た方向に見失った動物が居る事を知らされ、何とか写真撮影に到るのだが、出会いから後姿を見送るまでの凝縮された時間は、夢の中の出来事の様であり、大袈裟に言うならば私の人生を変えた30分だった。



秩父野犬遭遇の8日前突然逝った愛犬

秩父市内の毛皮、幾多の頭骨鑑定で以前より教示を受けていたニホンオオカミ研究の第一人者今泉吉典博士に19枚全ての写真を送り所見を待ったので有るが、博士からの書簡は、私の撮った写真の動物を“秩父野犬”と仮称し、ライデンのタイプ標本との比較をしつつ12点の類似点を例示、秩父野犬とは何であるか？との導き方をされていた。タイプ標本と写真での比較を行なった上で、今泉博士の目にピッタリ一致すると思えたのはどのような点なのか？原文のまま記して見る。



シーボルトが採集したライデンのタイプ標本

「秩父野犬」は日本狼 *Canis hodophilax* のタイプ標本（ライデンの自然史博物館所蔵の夏毛の本剥製）に酷似していて相違点が私には全くみつかりません。タイプ標本にぴったり一致するのは

- (1) 耳介が短く前に倒しても目に届かないこと（大陸狼 *Canis lupus* は耳介が長く前に倒すと目に達する）。
- (2) 前肢が短く体高率（体高／体長×100）が約50%（写真13）に過ぎないと思われること（タイプは48, 5%。大陸狼は体高率が高く、ソウル昌慶苑飼育のチベットオオカミ *Canis l. chanco* の写真では約62%、Brown, 1983が調べたメキシコオオカミ *C. l. baileyi* のそれは65, 7-71, 4%）。
- (3) 耳介の前に始まり下顎に達する長毛の塊（頬髭）があること（この特徴はBrownが初めて指摘したものでタイプにこれがあることは写真で確認。頬髭は日本犬やデングにはない。しかし大陸狼には顕著な頬髭がある）。
- (4) 胸と腰の上半分を覆う毛は胴下面の毛より長いマントを形成するが、この部分の毛は基部が灰色で先1／3だけ黒いため霜降り状を呈すること（普通の犬にはマントがない。しかし大陸狼にはある）。

(5) 背筋には先1/2以上が黒色の更に長く、且つやや逆立った毛で形成された黒帯があり、その外縁が肩甲骨の後縁に沿って下降し菱形斑を形成すること（普通の犬には黒帯がない。大陸狼には時に見られる）。

(6) 尾の上面基方1/3にはスミレ腺の存在を示す黒斑があること（写真16。Brownによると犬にはない。大陸狼にはある）。

(7) 尾端が黒いこと。

(8) 耳介の後面と頸側（写真17）及び前肢外面（写真7）には先の黒い毛が殆どなく鮮やかな橙赤色を呈し、灰色のマント部に対照する二色性を示すこと（二色性は犬や大陸狼では稀）。

(9) 前肢全面、腕関節の上方に暗色斑があること（写真7, 9, 17。犬では稀、大陸狼では約半数に現れる）。

(10) 目の周りに鮮明な淡色斑がなく特に四つ目でないこと（大陸狼では殆ど常に明瞭な淡色斑があり、しばしば四つ目を形成する）。

(11) 顔に額段（ストップ）がなく、吻が前頭部に対してしゃくれていない。このため吻上面に接する平面が目の上と耳孔より上の耳介前縁基部を通る（写真8, 大陸狼には軽度の額段があり、吻上面が前頭部に対してしゃくれていて、吻上面に接する平面が目と耳孔を通る）。

(12) 足底（前後足の地に接する部分）は中度の楕円形のようなものである（タイプでは計測不能であったが、ロンドンの鷲家口標本では前足が55×74ミリ、後足が46×60ミリであった。大陸狼はもっと細長いようである）。

「秩父野犬」に見られた以上12の形質は全て日本狼のタイプ標本に一致するが、大陸狼とはこのうちの1, 2, 8, 10, 11, 12, が違い、日本犬やデインゴに似た犬とは1, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 11, 12が違う。したがって「秩父野犬」の形態は日本狼に最も近いと断定できる。さらに「秩父野犬」の耳介は外縁が耳囊bursa上方で強く前方に屈曲し、先端部が丸い（写真9, 10, 19）が、これは耳介の外縁の曲がり弱く先が尖った日本犬や大陸狼とは顕著に違う特徴だと思います。これに似た狼は私が別種と考えている北極狼Canis arctos（全身白色）と日本狼（秩父の毛皮）しかないようです。ただ残念なのは日本狼のタイプ標本でこの点を確認していないことです。日本狼は大陸狼に近縁な動物でその亜種に過ぎないと長い間考えられて来ましたが、どうやら全く別の種のようなようです。「秩父野犬」の正体はともかく、ハスキー紛いの狼犬ではなく日本狼の生き残りの可能性がある貴重な動物であることだけは確かです。この正体は今後の調査によってしか解明されないでしょう。調査と保護に全力をつくされるよう期待しています。

敬具

1996年11月29日

今泉 吉典



今泉吉典 博士

翌年私は、マスコミを通して今泉博士の書簡と共に動物の写真を明示したのだが、蜂の

巢を突付く騒ぎ！とはまさにその事で、予想をはるかに超えた反響が私の周辺を襲った。生存に繋がる新しい情報は兎も角、新たな他のマスコミ取材と共に、首を傾げたくなる様な電話も頻繁に架かって来たのだ。

部分部分を捉えてアレヤコレヤと異議を唱える・・・一般人なら兎も角、名を出せば吃驚するような著名人も、マスコミの求めに応じてしたり顔で語っていたのだ。知らない事を“知らない”と言えないで、自分の中のイメージでニホンオオカミを語る・・・初期の研究者が犯した過ちを70年後にも再び繰り返していた。

“耳のプロフィールがすっきりしてないから犬である！”“スミレ腺は猫にも有る！”・・・等等。耳のプロフィールがすっきりしてないから犬であると言うなら大陸オオカミの群れの中にどれだけの犬が混じっているのだろうか？タイプ標本に存在するスミレ腺が秩父野犬にも有ると述べているのであって、ニホンオオカミ個有の特徴であるとは言っていないのである。様々な批判中傷が飛び交う中で呆れるだけで笑うしかない私がいるのを感じていた。

今泉著「分類から進化論へ」に依ると心配なタイプ判定システムの崩壊として、以下のように述べている。

『どうしても許せないと思うのはリンネ式の類型分類、つまりタイプシステムを逸脱した偽りの統合分類がはびこりだした事である。と云うのは、タイプシステムのおかげだと思



分類から進化論へー平凡社刊

うが、統合分類の中には、タイプシステムの原則を無視したものが少なからず見られるからである。そして、タイプシステムを厳守するには、タイプ標本を保管する施設がどうしても必要である。ところが分類学が普及するにつれ、タイプ標本の保管場所が、北米、南米、インド、ニホン等とヨーロッパ以外の国にも分散するようになり、いちいちタイプ標本を調べに出向く事が困難になってきた。このためタイプ標本を見ないで、現記載だけで同定する安易な分類が横行するようになった。これが偽りの統合分類をもたらしていると思う。』

タイプ標本との比較の重要性を訴えつつ、写真での同定が不可能である事を、「相違点が見つからない」と云う表現にしているように、私には思えてならなかった。

妙法ヶ岳

私の故郷新潟県魚沼地方ではアケビの新芽を“木の芽”と云う。山々に木々が芽吹き始めると雪に閉ざされた半年の鬱積を払うが如く、弁当持参で山菜摘みに出かけるのが何より楽しかった。木の芽もゼンマイもウドも分別せずに持ち帰るのだから、母は後始末が大変だったのだろうが、その頃はそんな気配りを持つ術も無かった。

家族全員での初登山は妙法ヶ岳だった。多くの人達が乗車を待つロープウェイを尻目に1時間近く登って行くと、日当たりの良い尾根筋に思いがけず木の芽が生えているので、夢中になって摘んでしまい、時間を取られ過ぎ予定変更をする事になってしまった。

変更で浮いた時間の多くは三峰神社境内の散策に費やしたのだが、1100mの山上に在る豪奢な建築物より、境内のヤマヌ像の多さと作者の創造性に目が奪われるのは自然の成り行きであった。

それから二十数年後、親としての責務を果たした私が木の芽摘みに夢中になった場所近くに在る、薬師堂休憩所の広場にテントを張り、パラボナアンテナで動物の咆哮を収録しようと試みたのは、

妙法ヶ岳登山の帰り道ここでオオカミの咆哮を聞いたとの情報を得た為で有った。＜最終バスの時

間を気に掛けながら、最後の一服をしながら目の前の妙法ヶ岳を眺めていると、物悲しく伸びたトーンで2～3声、しばらくしてまた2～3声・・・と＞

妙法ヶ岳、霧藻ヶ峰(1523m)近辺での生存情報は多々有って、その都度多くのエネルギーを費やして来たのだが、この時の証言者の居住地と私の其れが近い事も有り、念入りに話を伺った末での現地調査であった。三峰神社の御眷属がニホンオオカミで、神社の奥宮が妙法ヶ岳で有る為、信仰的な面その他を総合した時余りにも出来過ぎている！と指摘されるかも知れないが、情報を求めている私の元に声が届いているのも事実なのである。

神仏習合の名残りである宿坊興雲閣のすぐ横の鐘楼から鳴り響く厳かな目覚ましで床を抜け出し、御祈祷の太鼓の音が合図となり食膳に向う。三峰の朝は何時も浮世離れの空間から始まる。こんな朝を何度繰り返したことだろうか。大滝の奥里中津川方面での情報収集は別にして、奥秩父での探索は此处十年間いつも興雲閣からである。

ニホンオオカミが取り持つ縁で三峰神社附属博物館の客員研究員を拝命して十年近く経った事になる。ニホンオオカミのコーナー以外神社の神事等に全く無知な私で有るが、それでも自宅では枕元に神社の御札を置いて、起きると必ず両手を併せ一日の無事とニホン



家族最初の登山—30年前の愛娘

遥拝殿から望む妙法ヶ岳



三峰神社の御眷属

オオカミの生存の証明をお祈りしている。もうそろそろ大願成就のお告げが来るのではと山に入る度思っているが、中々そうも行かない。

3月下旬の或日、私は通い慣れた山道を足慣らしよろしく妙法ヶ岳山頂へと歩を進めていた。既にピークハント的登山から離れて久しい。此処10年を振り返って見ても山頂を極めたのは日光白根山、皇海山位で何れも同行者が居りそれに従った迄の事である。今回の様な1～2時間のコースは勿論、2～3日の山旅でも自分のペースで歩くのが意に叶っている。ともすれば旅の途中で新しい発見、話し相手に出会うものなのだ。

別れ際に手を振り合うだけの出会いもあれば、人生の指針を学ぶ事になる出会いもある。

4月の春山の準備を終え、しばしの静寂が漂う社務所を後に誰一人居ない境内を抜け奥宮への参道を辿る。鳥居の前には圧倒的に迫る和名倉山(2036m)、行く手の最深部に雲取山(2017m)が聳える。参道の古い石標に雲採山と有るが時代、生活を感じられて面白い。私達と和名倉山の関わりは枚挙に暇が無い位で、限られたこの紙面上に記す事はとても出来ないが、世紀が移る数年前の建国記念日に、私はこの山が造った不動滝周辺で咆哮を聞いている。

或新聞社のコラム面で“環境問題のシンボルとしてのニホンオオカミ”と位置付けされた事が有った。又、猫も杓子も“エコ、エコ”の大合唱であるコマーシャルベースの中、私達の活動を多くの人達に知って貰いたい反面、不見識な人達に活動現場を荒らされたくない。そんなジレンマの中の執筆でもあるのだ。

奥宮までの参道は、講社の人達が寄進した檜が続いている。

参道に根を張った檜が道の荒廃を防いでいるだけでは無しに、五線譜に並ぶ音符と同じく私の歩調がリズムを刻んで行く様にも思える。

博物館の事務長幸明さんが出勤途中カモシカに遇ったと言って居たが、奥宮参拝の私を迎えてくれたのはムササビだった。

大きなリスかとも思ったが、一際目立つ檜の中頃迄登った動物は見事な滑空を披露してくれた。静けさの中でこそその出会いなのだ。

少し歩く毎にその時々懐かしい思い出が蘇えて来るのは、老いの境地に入ったせいだけでもなさそうだ。

いつもの山行は遠い道のりと重い荷物、仕掛けてあるビデオカメラに対する期待と不安が入り混じり、とてもここまでの余裕は生まれないのだが、今日はのんびり時間を掛けて奥宮に往くだけの行程だから、普段気にも留めない事が眼から耳から入って来る。

道半ばの地点で雲取山への道が分岐され、少し歩を進めると開けた地点にベンチが設置されている。そこにこの参道随一と思われるブナの木が残っており、幹の上部に参拝記念か何かの証として多くの文字が刻んで有る。この文字の位置が不自然で、わざわざ梯子をかけて刻んだ訳でも無かろうに、秩父地方が大雪だった時の遺物なのかも知れない。今こんな事をしたらマスコミに取上げられて大変な事になる。尾瀬ヶ原でも苗場山でも湿原と称する到るところに木道が敷かれ、犬同行の登山でも格好の議論になる昨今なのだから。

少し前まで私達は定点カメラの前に餌を撒いて動物の収録をしていたが、生態系に与える悪影響云々で予想を超えるバッシングを受けて困った事が有る。釣り人の撒き餌と同じ発想なのだが、人それぞれ価値観が違うのだから色々の観点で物事を判断するのも仕方無

いのだろう。私の田舎では最近まで家に鍵を掛ける習慣が無かったものだが、大らかだったその頃が無性に懐かしくもある。もっとも我が家は施錠無しの状態が長く続いている。犬達の生活空間を広くする為と、盗られて困る物が無いからだ。昔の田舎の大らかさが私の性に合っているせいでも有る。

昨日の荒天で自分の巣窟に閉じ込められていた野生動物達は、死と隣り合わせの生を意識せず、春の日を浴び虫干しでもしているのだろうか。のどかな登山日和である。

山頂である奥宮には社としての表示は在っても山としての其れは無い。この地が神域で在るが故なのだろう。

そう云えば、ここ奥宮の感じが木曾御岳の山頂に何処か似ている様に思える。

西丸震哉さんの著した“山とお化けと自然界”(中公文庫)に依ると、木曾御岳の賽ノ河原には人魂がウジャウジャ出ると云う事だが、もしかして奥宮近辺にも出ているのだろうか？出たくとも御眷属に恐れを抱いて、出るに出れないので有るならば、私としては拍手喝采ものである。さもないれば生身の御眷属が近くに巣窟を持ち、其れを許さないでいるのだろうか。

想いを抱けば限りが無いが、ペットボトル一本だけの山行には時間の限りが有る。腹の虫が騒ぎ出して来たのを期に、奥宮を辞すべくポケットに手を入れ小銭を探して見たが、山用のズボンに着替えて来たのをすっかり忘れてしまっていた。

毎朝の信心に免じて今回は心だけの礼節で許しを請い、しかし近い将来の大願成就だけはお祈りして帰途に就いていた。



三峯神社奥の院妙法ヶ岳頂

昔の奥の院は雲取山だった

我が国固有の動物で有るニホンオオカミ

ニホンオオカミと云う限られた世界の中で考えた時、私達は今現在エキスパートと言えるのかも知れない。毛皮標本、頭骨標本の発見を含め少なからず実績を積み重ねて来た。しかしながら研究を重ねれば重ねるほど謎が深まって来て、迷路に迷い込んでいるのも事実である。真剣に入り込めば入り込むほど判らなくなって来るのである。

その原因はニホンオオカミ研究の先達に有ると思われてならない。昭和初期、日本犬の保存と並行してニホンオオカミの研究も始まったのだが、それから戦後のある時期までニホンオオカミは大陸オオカミの亜種と考えられていた。当時ニホンオオカミの生存を求めて山中深く分け入っていた人たちは、初期の私同様、大陸オオカミのイメージを求めて探していたのである。

江戸時代末期、医師シーボルトが採集した模式標本を持ってして「*Canis hodophilax* Temminck 1839」と命名したオランダのライデン自然史博物館初代館長テミンク (Temminck) は、動物分類学のルール上で「ニホンオオカミ」を新種とした。しかし有り体に言うならば、テミンク (Temminck) は「ニホンオオカミ」と云う言葉を全く承知していなかったし、テミンクが「*Canis hodophilax*」と命名した動物を後世の私達が便宜的に「ニホンオオカミ」と云っているだけなのだ。模式標本の作成上何らかの要素が加わって、生存状態の姿そのものとは云えないとしても、全身骨格、頭骨部位、剥製標本に於ける相違点等を考えた時、タイリクオオカミとは明らかに違った動物で有ると位置付けられるべきだし、比較類例が少ないとしても近年の遺伝子レベルでの研究がそう物語っている。



シーボルト腑分けの圖

新たな遭遇を求めて

現在私達が活動している地点は奥秩父山中である。VTR カメラを定点設置し動く映像の収録を試みている。友人でもあるフリーカメラマンの元吉氏が造ってくれた装置で、10年以上前から使用している。電子機器の発達が目覚ましい現在、パソコンのサイトで探せば容易く入手出来るが、民間人である私達にとって当時としては画期的機器で有った。一度山中に設置すればテープオーバー以外は2ヶ月間位カメラの前に現れる動物全てを撮影してくれる。勿論昼夜問わずで、レンズの前に現れた動く物体を感知するとSWが入り、動きが止まれば定時間後SWが切れる仕掛けの為、有人でカメラを作動していた以前が嘘の様な優れ物だった。それ以前は、富士写真（現フジノン）に勤めている友人が貸してくれた、軍事用望遠鏡で深暗の山中を監視及び撮影していた。100m離れていた深暗の世界でも物体を感知出来たが、有人で有る事が絶対条件だった。

長野で冬季オリンピックが開かれた前後数年間、私達のオオカミ探しは頂点に達していた。大凡の調査を無雪期に行い、フィールドサインの得られる冬季の3ヶ月間、山に籠って探索をしたのだが、その時有効的だったのが軍事用望遠鏡だった。京都で仏師をしている岡田氏が仕事を放り出しての末為せる術だったのだが、都合6ヶ月間の山籠りで兵糧切れとなった私達の前に現れたのが無人VTRカメラだった。

文献に出ていた山中をひたすら歩き偶然の出会いを期待していた初期の頃から、タイリクオオカミの遠吠えを山中に流しテリトリーを侵されたと感じたオオカミの咆哮を収録する方法、得られた情報の地点にパラボラアンテナを設置し音声起動SWを作動させ収録する方法。そんな試行錯誤の中での定点VTRカメラ使用は、飛躍的に私達の活動を前進させてくれた。

例え目的達成には至らなくとも、食物連鎖の下位-オオカミの餌-とされる動物たちの机上では得られない様を知る事が出来たし、何より山中にカメラが設置されている時は私自身山中に居る事と同義であった。

明治38年(1905) 奈良県東吉野村鷲家口で米人アンダーソンが採集し英ロンドン自然史博物館に納められている毛皮標本。あるいは、明治43年に福井城内で射殺された動物を以てして、最後のニホンオオカミとするのが一般的で有るが、いずれにしても一世紀以上続いた空白の時間が余りにも倅しい。その空白の時間を埋めるに私達は恐ろしい程微

力であるが、誰かが埋めなくてはならない空白であり、私達が遣り遂げられないとしても私達を踏み台に、志を高く持った誰かがステップを踏めば良いと考える。残念ながら今現在生存の証を提示することは出来ないが、それが可能で有ると自信を持って言える材料を



トレイルカメラ

トリガースピード（感知してSWがONする時間）が遅いため今は別のタイプを使用



咆哮の収録にと、パラボラアンテナを使っていた

少なからず持ち合わせ、積み重ねているのも事実である。四十年前の深夜の苗場山中の出会いを振り出しに、試行錯誤の末ではあったが現在の私達が有る。肝心なことは正確な踏み台を重ねる事だと考えている。

2009年4月5日 終稿

筆者注 平成21年6月1日発行の山岳雑誌「岳人」で提示された文面は、
「生存の軌跡」を基に掲載されました。



安谷川での会合
後列右2人目が岡田氏

ニホンオオカミ探訪記

1996年5月。

日本オオカミ協会の機関誌“フォレストコール”の編集長(当時)高橋正男氏から誘われていた、北海道中標津町の桑原氏飼育のシンリンオオカミ、北極オオカミを見学する件。どうせ北海道まで行くなれば北大の蝦夷オオカミの剥製標本も見ると考え、高橋氏より一日早く飛行機に搭乗し、翌日中標津空港で落ち合う事にした。実は2点の剥製標本の他にもう1点見たい物が有ったのだが、学芸員の先生と打ち合わせしていたにもかかわらず、その日会う事が出来ず未だ宿題として残したままである。



北大の蝦夷オオカミの標本

土浦市から移り住んで間もない桑原家のオオカミは、現在のように飼育下であってもある程度の範中で自由に動けるのとは違って、離農者から譲り受けた畜舎にゲージを設けただけの状態で、云わば個人動物園のオオカミコーナーと言った感じであった。しかし、畜舎の後に広がる雑木林に柵を張り巡らせ、“オオカミの為に広いスペースを提供したい”等の夢を語る桑原氏の話聞きながら、心の中ではエールを送りたい気持ちと、少しのジェラシーが交錯していた。今回の旅は近辺の養老牛温泉に2泊の宿をとり、高橋夫妻と知床までドライブした事等も手伝って、オオカミにかこつけた北海道旅行のようなものでもあった。



桑原家のオオカミ

狭い檻の中での飼育で犬歯が・・・

北海道から帰って間もなく顔見知りの長岡氏から電話あり。

長岡氏との交流は2～3年前に奈良県東吉野村で開かれたオオカミフォーラムからだが、オオカミ関連の催しがあると必ずと言ってよいほど顔を見せる人で、いつも笑顔を絶やさない人柄とその熱心さに敬意を表していた。

岩手県の知り合いがニホンオオカミの毛皮を持っているから一緒に見に行かないか？との誘いであった。その頃はまだ国内外5例が、認知されていただけの毛皮標本だったが、その年3月、秩父市の民家で保存されていたものが、限りなくニホンオオカミに近いとの鑑定を受けていて、そんなに旨く事が進んで良いのかと少し不安になる。何しろ昭和の初めその研究が始まって以来、5例しか認知されていない標本なのである。長岡氏に段取りをお願いし、無理に



ライデン博のタイプ標本頭骨C

歯の磨耗状態を桑原家のオオカミと比較するとシーボルトの出島での飼育方法が想像出来る

仕事の都合を付け善は急げとばかり、再び北へと向う。

毛皮所有者の黒澤氏とは、前年行われた三峰でのニホンオオカミフォーラムでお会いしており、半年振りの再会とは裏腹に、心は家人以外見た事の無い毛皮に行ってしまうのはやむを得ないことだった。

座敷の中で初めてお披露目された毛皮を目の当たりにしたとき、意気込みが空回りしている自分を意識する。犬科動物の毛皮には違いないのだろうが、ニホンオオカミとして有しているべき特徴（私の知識の中での）が殆ど見当たらず、近い将来遺伝子的レベルでの鑑識方法が確立してからの課題なのかと、

考え込んでしまう。ともかく秩父の毛皮、その後に発見されたドイツの毛皮等を見た時と、全く違う感じ・・・直感での心のときめきが全く感じられなかったのは確かだった。そうであるだろうと言う事を言えても、そうでないと言う事をいえる立場に無い私は『DNA 鑑定が確立されてからの課題』ということにして、次の目的地十和田市の正法寺に行く為の交通手段を考え出す・・・毛皮が長時間の調査を要しない時、十和田市まで足を延ばしたいと考えていたので、黒澤氏の配慮で車に乗せて戴く事となり、ホットー安心する。

正法寺には当時国立科学博物館動物研究部の吉行瑞子博士から、ニホンオオカミと鑑定を受けたミイラ化した右後肢が伝えられており、アポ無しで見せて貰えるものか少々不安がよぎったが、“お願いすればなんとかなる”と気持ちを入れ替え、行くだけ行って見る事にした。

“1日遅けりゃ中国に行っていた”と招き入れる和尚の笑顔に、心の中でつい“ラッキー”のつぶやきが・・・捨てる神あれば拾う神ありということなのか！

二戸駅前での夕食後、黒澤家泊まりの長岡氏と別れ、翌日の予定を少しでも楽にしたいとの思いで、盛岡駅前の宿に潜り込んだのは、相当遅い時間になってしまった。

翌朝駅前発のバスに乗り遠野市経由で大船渡市まで。郊外の佐藤氏宅に保存されている頭骨上下の吻端部を調査。漆塗りで非常にきれいな物では有ったが、熊の頭骨であった。

(Fig-2)ニホンオオカミ関連の書物を多数執筆されている、斐田猪之介氏の書物に紹介されていた標本であった為、斐田氏書物中にて紹介された標本の見直しを痛感する。

その日午後、仙台駅に立った私はこのまま帰るには惜しい気持ちとなり、米沢市の清水大典先生に連絡し、本日のご都合を伺い了解を得る。清水先生宅には東京都の最深部桧原村産頭骨吻端部があり



岩手県下黒沢家の毛皮標本



十和田市正法寺のミイラ化したニホンオオカミ右後肢



岩手県大船渡市 佐藤家の標本

(直良信夫著“日本産狼の研究”260P 狼の乳を飲んだ貞次郎老人)、先生が見出したその標本を拝見すると共に、若い頃の苦労話等も伺う。

翌日山形県内小国町の旧家に有ったとされた頭骨探訪とも考えたが、時間の都合で新潟県村上市からアクセスできる三面まで足を延ばす事とした。小国も三面もニホンオオカミ研究の先駆け斉藤弘吉氏の著書「日本の犬と狼」に紹介されたところであった。

翌週中央高速道を飛ばして長野県飯田市龍尾、林家の頭骨を拝見後、同じ龍尾の木下家を訪ねる。故木下仙氏の著した「村長日記、続村長日記」にはニホンオオカミ関連の文が多く載せられており、現在では中々手にする事が出来ない為、ついでは失礼だが、訪問した次第である。文中の一コマを紹介すると『私の村で四個の狼の頭骨が発見された。魔除けとして神棚に、家(や)の棟(むね)に、或いは根付などとして、それぞれの家に保存されてきたものである。このことを私が随筆に書いたら、東京の某大学の教授が調査計測のために訪ねてきた。「秩父山系の狼の頭骨によって、日本産狼の問題を研究している者です。赤石山系の狼に逢えるかもしれぬと楽しんでやってきました。当時高価であつたらしくにせ物が横行し、持ち主には言えぬが、狐や犬や熊などの頭骨であることも多いのです」との話だった。丁度その時、村内で熊が獲れ(7月という季節外れだったが)肉の煮つけがあつたので、私は教授にすすめた。「これは、望外の幸運です」大変よろこんで、早速一片を口に含んだが、至極奇妙な顔をした。客は二度とは箸を出さなかった。この熊は特に異臭が強かった。間もなく東京の教授から、印刷された彼の日本狼に関する

研究論文と、手紙が来た。「御高配によって、たしかに赤石系狼第一号(私としては)に面会することが出来ました。他の三個については更に研究の上……。なお珍味熊の肉には恐れ入りました」よくよく恐れ入ったのである。』……………。

ちなみに赤石系狼第一号とは林家頭骨であり、望外の幸運と云いつつ熊の肉を一片しか口に含まなかった研究者とは、直良信夫博士の事である。



在りし日の清水大典先生



飯田市林家の上顎吻端部

その後飛騨高山の手前、宮村の郷土資料館に保管されているニホンオオカミの皮で作ったと伝えられている太鼓を調査。この太鼓は平岩米吉著「狼その生態と歴史」に掲載されているのと同じものらしいが、私が知り得たのは代情山彦著作集からで、その御子息岑郎氏とは現在も年賀状のやりとりが有る。数多くの賀状の中でも、独特の表現方法に感銘する事が大で、最も待ち望む中の一つになっている。

宮村を後にその日の宿である奥飛騨の双六荘まで車を飛ばす。双六荘には斐田猪之介氏言うところの、“白いオオカミの剥製”が保存されており、大船渡の佐藤氏宅で感じた“標本の見直し”の核心的位置を占めていると感じていたのである。宿に着く早々、2階の狭いコーナーに展示されていた標本を覗くと、想像通り“直感での心のときめきが全く感じられない”状態のモノであると分かった。剥製の中には頭骨が入っており、調査できる範囲の歯、特に犬歯の形状はキツネそのもので、剥製自体及び尾の長さ、形状ともニホンオオカミの特徴とは著しく異なっており、アルビノ化したキツネその物であった。その以前奥秩父の廃屋で殆ど同じ物を見ていた事を思い出していた。

その他、斐田氏がヤマイヌと主張する剥製が奥飛騨近辺に少なからず存在したが、私が実際に見た物は全てキツネであった。尾の長い剥製も、途中で切断されているような形状の剥製も含めて全て！ 翌日帰りの途中、直良信夫著“日本産狼の研究”に紹介された茅野市の両角家に立ち寄ろうとしたが、頭骨の存在自体を否定され、中央高速道を一路埼玉の自宅に向う。今回のドライブは一千数百キロに渡る一人旅で、疲労の極限に達してはいたが、充足感に満ちた旅でもあった。



ヤマイヌの皮で作ったと伝わる太鼓



アルビノ化したキツネの剥製



斐田氏云うところのヤマイヌは 全てキツネの標本だった

オカタの山の神

ニホンオオカミの毛皮標本が2004年3月現在、未発表の物を含めて国内外9例と少例なのに比べて、骨片を含めた頭骨標本は以外と多く残されている。秩父地方、紀伊半島でその標本が多く産出されている様に思われがちだが、一番多いのは神奈川県の日沢山系とその周辺の地域である。都下の御岳神社、奥秩父の三峰神社を有する地域に残された頭骨標本の中には、憑き物落とし等の儀式に使用されたせいで、原型を留めないほど削られてしまった物があるが、日沢を含めその他日本各地に残された標本は、捕獲時に傷つけられた部分以外は、比較的きれいな状態で受け継がれている。それは四国の阿波の国に於いても同様である。



秩父市多比羅家の薬用に使われた頭骨

私は知り得る限りの標本資料を再点検し、許される限り手にとって計測をし、写真撮影をしながら存在の確認をした。例えば校倉書房発行直良信夫著の、“日本産狼の研究”は、昭和四十年の出版で、調査時点からおおよそ四十年を経た現在、文中に掲載されている所有者のほとんどが代替わりとなっていた上、居住地が変わっているような例もかなりの数をかぞえた為、再確認ではあったが困難を極めた。

近い将来DNAの基礎データを確立させる為に必ず必要となるであろう、頭骨の所持者リストの作成をする為に、ニホンオオカミ研究の協力者とも言うべき、井上百合子氏、大場烈夫氏等と連絡を取り合いながら、一頭体ずつそれぞれの所有者とコンタクトを取り、持ち主の意向を聞きつつ一つ一つとリストに加えていった。標本の確認、再確認作業は注ぎ込むエネルギーの割には遅々としていたが、時間の経過と共に少しずつでは有るがリストは増えていった。



直接現地に行って標本を手にしてみると、在野の研究者からニホンオオカミの標本として示された物の中に、かなりの割合で、どう見てもニホンオオカミとは考えられない標本が混在しているのが分かった。井上氏等と相談して、“近い将来”ニホンオオカミの標本として集め得た全てを、直接自分たちの手で一冊にまとめて、資料として残す必要性を痛感したのは丁度その頃からである。



飯能市の民家に伝わるイヌ科動物標本

しかし示された標本がニホンオオカミでは無く、違った動物の標本であっても全くの無駄足であったわけではない。飯能市内のある家に伝わっている頭骨と、その近くの神社に奉納されていた頭骨は多くの類似点があって、ある時点においてその近辺ではその類の

イヌ科動物が群れを成して生息し、ニホンオオカミと考えられていたのではないかと、思い巡らすこともできた。岩手県内の上下顎骨片は、正体が熊であっても喉から手が出そうになる程、美しく塗り固められていて、民俗学的には充分価値があると思われた。

神奈川県下は別にして、関東近辺、関東以北に点在する標本の、ほとんどの確認が終えた頃、思いがけず朗報が飛び込んできた。

直良信夫博士の著した“日本産狼の研究”に掲載されている長野県下天龍村の「オカタの山の神」の頭骨が、長野市立博物館で、近々展示されると言う情報である。以前私は、飯田市内の頭骨片、非太猪之介氏言うところの“白い狼”等を調べる傍ら、天龍村迄足を伸ばそうとしたのであるが、折悪しく他に貸し出してあって見る事が出来なかった、と云ういきさつがあった。長野、静岡県境に位置する天竜村に行く事を考えたら、未だ高速道路が佐久までしか通じていなかった当時であっても、長野市は楽に移動できる位置に思われたのだ。

頭骨の管理者である橋爪氏並びに、長野市立博物館の学芸員畠山氏の了解を得た私は、七月のある暑い日、大場氏と共に長野市立博物館へと車を飛ばした。長野県下で出された、ニホンオオカミに関する文献に登場する「オカタの山の神」の頭骨と、(例えば、松山義雄著“狩りの語り部”、“伊那谷の自然第52号”等)直良信夫著“日本産狼の研究”に掲載された頭骨が同じ物とする事に、かねてから疑問をもっていた私は、畠山氏に会うと、いの一番に下顎の存在を聞いてみた。すると私の予想通り、天龍村向方のオカタの山の神の神体として秘蔵されている頭骨は、元々上顎のみの標本で、“日本産狼の研究”に掲載された頭骨とは、別の頭骨だと云うことがほぼ確実になった。その日、余りの暑さの為うかつにも計測器具を忘れた私達は、大場氏のスケッチにおよその寸法を記入し、写真撮影をして長野を後にした。(後日改めて天竜村に出向き再調査をした)

その後撮影した写真全てと、私の考察等を今泉吉典博士に送り、所見を伺ったのであるが、私の家に返書が届いたのは秋も半ばを過ぎていた。

書簡は「オカタの山の神」の頭骨を「八木頭骨」と仮称し、その頭骨の同定のプロセスをA4の用紙6ページに事細かに認めてあった。

今泉博士は、高い信頼限界で八木頭骨(オカタの山の神)はニホンオオカミであると判定



御岳神社に奉納されたイヌ科動物頭骨



天竜村御方の山の神と大場氏のスケッチ

し、“日本産狼の研究”で記録された頭骨とは別物である事を、諸々の計測値等から判定されていた。書簡中「オカタの山の神」の件に関連して、非常に重要なことが記されてあったので抜粋してその一部を紹介する。

A) Pocock (1935) は大英自然史博物館所蔵の新旧両世界産の狼類（ニホンオオカミやホッキョクオオカミを含む）を調べ、それら全てをオオカミ Canis lupus の亜種と判定した。殆どの専門家は、この見解に従っているが、私 (1980) は少なくともニホンオオカミ Canis hodophilax はタイリクオオカミ C. lupus の亜種ではなく、それぞれ別の種だと思うようになった（その後ホッキョクオオカミ C. Arctos も同様に別種と考える様になったが詳細は未だ説明されていない）。それは、旧世界と新世界に分布するタイリクオオカミの亜種の頭骨基底全長 C B L 平均値は生息地の一月平均気温 X と相関して変化し、回帰方程式 $Y_c = a + b \times X$ で示す事が出来る直線を形成するのに、ニホンオオカミとホッキョクオオカミはこの回帰直線に一致しないからである。鼻骨率（鼻骨長÷頭骨基底全長×100）平均値でも同様な現象が見られる。旧世界のタイリクオオカミは今から約 80 万年前に現れたが、新世界へ進出したのは約 40 万年前である (Kurten and Anderson, 1980)。したがって両大陸の個体群は殆ど 40 万年間も隔離されていて交流が無かったと思われるのに、頭骨基底全長と鼻骨率の回帰方程式の a と b の値は全く変化していない。少なくともこれら二つの形質を支配する遺伝子は進化を停止していたようである。ところがニホンオオカミとホッキョクオオカミは、頭骨基底全長と鼻骨率がタイリクオオカミと違い、これらに関連した遺伝子が違うように見受けられるのである。私がこれらをタイリクオオカミとは別種と考えたのはこの他、耳介と後足が短いことも考慮した結果である。

『オカタの山の神の頭骨』はニホンオオカミである。上記のようにタイリクオオカミでは頭骨基底全長平均値は生息地の一月平均気温が低くなるにつれてゆるやかに大きくなり、鼻骨率平均値は反対に気温が下がるにつれて次第に低くなる。したがって気温 0 度前後の本州に生息する狼がタイリクオオカミの単なる亜種に過ぎないなら、その鼻骨率 (N=12) の $M \pm SD$ の範囲 (68% の個体が含まれる) は、気温 -10 度前後の朝鮮半島からチベットまで分布するチベットオオカミ C. l. chanco (N=4) の 40.6 ~ 42.8 ($M \pm SD = 41.7 \pm 1.1$) と、気温 +10 度前後のインド北部に分布するインドオオカ C. l. pallipes (N=8) no43.1 ~ 46.1 (44.6 ± 1.5) の中間でなければならないのに、実際は 36.3 ~ 38.9 (37.6 ± 1.3) で、どちらよりも低い。

このようにニホンオオカミは鼻骨率だけでもタイリクオオカミの全ての亜種と区別できる。(信頼限界は $50\% + 34.1\% = 84.1\%$)。なおアメリカのタイリクオオカミで 1 月平均気温が日本に近いのは -5 度前後のモンタナ、アイダホ、ワイオミングに分布するモンタナオオカミ C. l. irremotus であるが、これの鼻骨率は 40.6 ~ 43.6 (42.1 ± 1.5) とニホンオオカミより遥かに高く、チベットオオカミにほぼ等しい。なおニホンオオカミとチベットオオカミの鼻骨率の違いは、その差異係数 CD から推定すると両個体群の約 95% の個体をこの形質で選別できる程度に達している。差異係数 CD (Mayr 他、1953 が提唱) とは「平均値の差」と「標準偏差の和」の比で、この場合は平均値の差が $41.7 - 37.6 = 4.1$ 、標準偏差の和が $1.1 + 1.3 = 2.4$ であるから、 $CD = 1.7$ となり、二つの集団の重なり合わない部分の面積が 95.5% 以上に達することが推定される。

このようにニホンオオカミはタイリクオオカミの亜種ではなく別種であるが、その識別形質として有用なのは私が計測した部分に限ると鼻骨率しか見当たらない。そこで八木頭骨（オカタの山の神）の鼻骨率であるが、写真から計算した限りでは36前後となる。この値はニホンオオカミの標準的な個体が含まれる $M \pm SD$ の範囲にきわめて近く、地域的に最も近い朝鮮半島に分布するチベットオオカミとは顕著に違っている。したがって八木頭骨（オカタの山の神）はユーラシア大陸とアメリカ大陸に広く分布するタイリクオオカミの亜種ではなく、明らかにニホンオオカミである。

B) 側頭窩の神経孔が左5個、右が6個の件。ニホンオオカミにもこのような例が頻繁に見られる。（タイリクオオカミでも同様）。ところがイヌ（日本犬を含む）では、私が調べた限り常に5個であった（故世古氏が日本狼の血が混じっていると称していた1個体だけは6個であった）。したがって右が6個あっただけで「八木頭骨（オカタの山の神）はイヌでないと考えてほぼ間違いない。なお神経孔は他のイヌ科動物(キツネ、タヌキ、コヨーテ、ジャッカル、ドール等)では私が見た限りでは常に5個で、原始的な状態を示すと思われる6個型が不思議な事に最も進化度が高いとしか考えられない狼にしか現れない。

Mivart(1890), Pocock(1935), 安部余四男、平岩米吉、斉藤弘吉、直良信夫等の諸氏が狼のこの特徴を無視したのは、イヌ科全体を対象にすると6個型が極めて稀なためかも知れない。私はイヌ科動物の頭骨382個以上（大多数は大陸狼）でこの孔を調べたが、怠けていて未だ詳細を発表していない。

C) 直良信夫著「日本産狼の研究」(1965)、145頁「長野県下伊那郡天龍村神原向方地方産の頭骨」に記録された狼頭骨「直良頭骨」と「八木頭骨」の関係。私の率直な感じではこれはどうやら別の個体のようです。それは頭骨を真上から写した写真後端のデルタ形の部分が、「八木頭骨」では左右のラムダ稜が合わさって約60度の鋭い角を形成し、ラムダ稜の何処にも傷（不自然な欠損部）がないのに、「直良頭骨」ではその角が90度に近く、しかも右稜には2個の大きな欠損部（切り傷）があるように見えること（写真が不鮮明なので見間違いかも知れません）、及び頭骨全長に対する頬弓部率（頬弓部幅÷頭骨全長×100）が違ふと思われるからです。頬弓部率は「直良頭骨」では58.4%(直良氏が写真から推定した計測値に基づく)で、私が同様にして求めた値も58.7%と大差ないのに、「八木頭骨」では実測値が55.6%しかなく写真ではそれ以下の値しか得られなかったからです（写真1が53.6%、写真16が54.5%）。写真からの計測値はあまり当てにはなりません、頭骨後端部の形態、特にその切り傷は重要だと思います。……………

1996年8月28日 今泉吉典

とすると、直良信夫著内の頭骨は、何処に有の
だろう・・・？と、興味は別の所に移り、写真撮影
者、提供者と思われる向山雅重氏（未亡人）、千葉徳
爾氏等に、その疑問の程を投げかけた。

非常に大きなエネルギーを傾けたのであるが、残
念ながら現在に至るもその所在は、明らかになっていない。「直良頭骨」の所在が明らかに



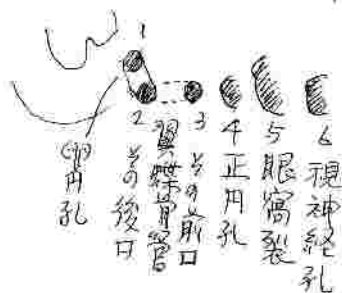
裏打ちされた内田家の標本を鑑定中の今泉博士

なって、長野県下四例目の標本となる日が早く訪れるようにと願うのは、私だけではないと思えるのである。

今泉吉典 拜

写真31

＝木ノイカニの神経孔



イヌの神経孔



今泉論文中の神経孔挿絵

秩父の民家に残されたニホンオオカミの毛皮

‘95 は公私に亘り、非常に多忙な一年であった。当時交流があった、奈良県の N 氏から、ニホンオオカミの二回目のフォーラムを関東でやらないかとの誘いがあり、大場氏と二人でその段取りをすべく、必死の思いで駆けずり回っていたそんな最中“ 秩父市内の民家にニホンオオカミの毛皮がある ”との情報が、思いがけず飛び込んできたのである。

まさかとは思ったが、寄せられる情報の全てを確認することが、生存の証明が出来る最も近道であると考えていた私は、早速通い入れた秩父へと車を走らせていた。秩父駅からさほど遠くない民家の、二階に上がる階段の、右の壁に吊るされていたその毛皮は、それまで私が見たニホンオオカミのどの標本よりも大きく、色が退色していなくてきれいだった。事前に了承を取り付けていたが、初対面の私に、持ち主の内田さんという女性は、笑顔を見せるわけでもなく、事務的にむしろ無愛想に、聞かれた事に答えるだけだった。長い時間を掛けて内田さんから聞き出した話を要約すると、おおよそが次の様であった。



内田 茂さんと毛皮

明治14年生まれの内田さんのお父さん武助さんが、自転車屋をしていた昭和の初め頃、三峰の奥裏（おくり）で獲れたニホンオオカミで珍しいからという事で、誰かに譲ってもらった。内田さんが、その存在に初めて気づいた小学校二三年の頃は、お蚕様の繭をいれる、大きな缶の中に入っていて、実家の近くにキツネが出て困る時、時折魔除けのため、縁側に出していた。毛皮に対して家族の関心はほとんど無く、昭和四十八、九年に現在の家に立て替えた時、内田さんも一時毛皮の処分を考えたと言う。しかし前の家で使用していた戸板にシーツを掛けて、毛皮を貼り付けてみたらなかなか良い雰囲気だったので、階段の脇の壁に掛けて、そのまま現在に至ったのであった。私が知人に連れられて初めて毛皮を見た時、感激と興奮で“すごい”の連発であった。明治三十八年一月に奈良県小川村鷺家口（現在の東吉野村）で、ニホンオオカミ最後の標本とされる若狼が捕獲されてから以後、数々の標本等がニホンオオカミではないかと提示され、そして消えていった。



壁に掛かっていた毛皮

フジTVのカメラマンと)

私は内田家の毛皮を見てすぐに“同じ憂き目に合わせてはいけない。いつ、どこで、誰が捕獲したのか、はっきりする迄公表するのは止めよう”と考えた。その為、信頼できる一部の仲間(井上、大場両氏)にしか、毛皮の存在を明らかにしなかった。明治38年以降の捕獲で有るなら其れまでの学説を塗り替える事になるし、国内4例目の剥製である事が明らかになれば、昭和24年に発見された和歌山大学の標本から数えて、半世紀振りの発見ということに成る。それからは、休みのほとんどを秩父での情報収集に当てて、非常に

大きなエネルギーを注ぎ込んだ。しかし時間を掛けても、期待する様な成果はほとんど得られぬまま、無駄に思える時間が過ぎていた時、私が断念せざるを得ない留めの一言を、秩父宮記念三峰山博物館館長の山口民弥氏がポツリといった。

“信州の善光寺さんの存在と同じ、大滝村の三峰神社の、その守り神であるニホンオオカミを、たとえ間違いで有ったにしても、「獲った」などと言う事を、何処の誰が言うものか。他の土地の人ならいざ知らず。大滝の近辺で探しても無駄ですよ。・・・”と。

確かに埼玉県内に残されている頭骨のほとんどは、大滝近辺以外の産出であったし、たった一つの例外である、三峰で獲れたとされる上顎骨片も、所有者は狭山市在住であった。

私は、昭和四十四年の夏、新潟県苗場山中でニホンオオカミと思われる咆哮を耳にして以来、その存在を信じて各地の山々を歩き廻ったが、ほとんどが聞き取り調査と、偶然の出会いを期待するフィールドワークであった。民間のニホンオオカミ研究者のほとんどがそうである様に、標本を自分の手にする事など無かったし、ましてニホンオオカミと朝鮮狼の違いなどと云うような、専門的な知識については知る由も無かった。

和歌山県の山奥で家族共々その研究に没頭している、井上百合子氏に出会うまでは、正直に言えば私の学術的知識は乏しく、多くの知識を井上氏より得たと言ってよい。これまでもそうであったし、これからもある毎に相談をすると思う。ところで三峰山博物館の山口館長に引導を渡されて、内田家の毛皮の経緯追求をあきらめた私は、井上氏に事の次第を相談の上、毛皮の鑑定をして貰うべく、学識経験者に手筈を整えてもらう様お願いしたのである。

1996年3月初め、秩父市内の内田家に在る毛皮鑑定の為、元国立科学博物館動物研究部主任研究官で、その当時、東京農業大学農学部畜産学科教授だった吉行瑞子博士を始めとする一行が訪れた。かなり長い時間をかけての鑑定で、国内外六例目の標本として、同定が期待された。(実は当日、吉行教授と共に、国立科学博物館教育部科学教育室長の小原巖先生も、おいでになる予定だったのであるが急病と云う事で、3月末に改めて秩父にお越し戴いた)

其れまでニホンオオカミの剥製標本として、同定されていたのは世界で5例のみであった。それは、国立科学博物館蔵の福島県産の剥製。東京大学農学部蔵の岩手県産の剥製。和歌山大学蔵の紀伊半島産の剥製。外国に於いては、ロンドン自然史博物館蔵の仮剥製、



山口館長と裏打ち後の毛皮



狭山市長谷川家の上顎吻端部標本

三峰山中で獲れたと伝わる標本で他は博物館蔵の毛皮だけ



左、吉行瑞子博士、右、井上百合子さん

オランダの国立ライデン自然史博物館のタイプ標本。これらは何れにも、頭骨が残されていて、頭骨の調査からも、ニホンオオカミの標本であることははっきりしていた。

しかし内田家の毛皮には骨格、頭骨等が残されておらず、鑑定に立ち会った先生方も、ニホンオオカミと同定するのに、二の足を踏んだのかもしれない。そして“限りなくニホンオオカミに近い毛皮”

とコメントをしながらも、公式な文書が出される事なく、最近までその状態が続いていた。

その後私は井上氏からのルートとは別にある人の紹介で、吉行、小原両先生以上にニホンオオカミ研究の第一人者として知られていた、元国立科学博物館動物研究部長の今泉吉典博士に、手持ちの写真全部を送ってその見解を伺う事とした。今泉博士は私たち民間研究者にとって雲の上的存在で、安易にコンタクトを取る事など、その頃の私には考えられなかったのだ。暫らくして今泉博士から届いた書簡には次のような文面が認められていた。

「前略、この毛皮の事は新聞で知り、大きさと四肢の短い所や、尾の感じからも、ニホンオオカミにまず間違い無いと思っていましたが、今回お送りいただいた耳介や、足裏の写真を拝見して、ますますその感を強くしました。

もっとも私は、ニホンオオカミの外部形態は、ライデンの自然史博物館にある、タイプ標本（本剥製）、ロンドンの大英（自然史）博物館の鷺家口産標本（仮剥製）、及び国立科学博物館の岩代産標本（本剥製）、の3点しか調べた事が無く、耳介長と後ろ足長が大陸狼より短いことしか、特徴を知りませんので、写真だけでニホンオオカミと、断定するわけには参りませ

んが、耳介と足底の写真には、典型的な大陸狼では記載されていない特徴が見られました。なお、私（1980）は、ニホンオオカミ（日本狼）（*canis hodophilax*）の頭骨が、大陸狼（*Canis lupus*）の頭骨長の直線クラインに一致しないことや、その他の特徴から、ニホンオオカミはその亜種ではなく、別種だと考えています。（在来家畜研究会報告第9号）・・・以下原文のまま、

中略、「まだこの他にも大事な事が見つかるかも知れませんが、毛皮をこの目で確かめたいのは山々ですが、体調が思わしく無く外出できませんので、残念ながら参上できません。」・・・

2001年春、内田氏から毛皮の処遇について相談を受けた私は、迷う事無く三峰神社への寄贈を勧めた。三峰の奥裏で獲れたのであるならば、三峰に帰するのが自然の成り行きと考えたのだ。保存方法に多くの問題があった為、手を触れる事さえはばかれる程ボロボロの状態だった毛皮も、今泉博士の勧められた尼崎標本剥製社に依る丹念な



内田さんを中心に左が小原巖先生



毛皮の耳介



裏打ち前の毛皮

裏打ち作業終了後、三峰神社付属の博物館に納まった。

翌2年4月の一般公開を前にした2月、阿佐ヶ谷の今泉博士宅を訪れた私達は、国内外7例目のニホンオオカミ標本としての認知を得る事に成った。

心ばかりの手土産で伺った私達であったが、3月10日付けの博士からの礼状には、次の様に書かれてあった。

・・・実は私がニホンオオカミの毛皮の鑑定に自信を持つに至ったのは、一昨年の事で、それまでは自信を持ってませんでした。こうなりましたのは八木さん、九州の西田さんなどの熱意が、頭骨に片寄り勝ちだった研究心を外部形態にも向けるようになった結果だと思って、感謝しています。

恐らく、専門家と称する先生方は信用されないでしょうが、外部形態が頭骨にも増して重要な場合があるのです。・・・

今泉博士が外部形態としてポイントの一つとして挙げているのが、ファウナヤボニカ（日本動物誌）に記されていた“尾端に房を得ず”の文面である。此れについて剥製制作上の問題で外部形態には当たらないと主張する在野の研究者も居たが、その後次々と発見された毛皮標本が、同様の特徴を有しているのは紛れも無い事実である。



裏打ち後の毛皮

筆者注 内田家の毛皮の存在を知ったのは、フンボルト大学の毛皮再発見（29P 参照）より早い段階であったが、正式な鑑定、認知、を得たのは後年の為、7例目となる



三峯神社本殿

雲取林道 ごもっとも様の日

(2004年2月3日)

三峰神社で行われた節分祭に参加した私たちは昼食もそこそこに、車を飛ばして山中の散策に向っていた。昨晚からの降雪でフィールドサインを求めるには絶好の状態で、今までの経験上何か得られると感じていたからだった。

その山域では不特定多数の人達から生息に繋がる情報が得られており、その殆どがここ10年以内の新しい物であった。私も6年前の2月11日、氷結した滝見物の帰りに其れと思われる咆哮を聞いたし、同行者の獣医も聞いている。3年前の1月初めには人家から10数キロ離れた林道上で、猿の足跡と共に求めている動物と思われる足跡も見つけていた。-----前の晩から降り続いた雪は膝まで埋もれさせ、村の除雪車は悪戦苦闘を強いられていて、自衛隊出身でその道のプロが運転する車は、何度も立ち往生しながら林道の最深部近く迄移動したが、運転手の顔は引きつっていた。車を捨てて1時間近く進んだ山中に、猿を追ったその足跡は深い谷から出て来て、そして帰っていた。足跡の上には雪が冠っていなかった為、私達の気配に驚いて姿を隠した様子が思い描かれた。右手の斜面では猿の集団が、安堵の息を洩らしながらも及び腰で私たちを眺めていた。-----

一ヶ月前の深夜、2年参りの為家族と共に三峰神社を訪れた私は、帰り道この林道上に車を乗り入れようとしたのだが、娘の強硬な反対にあって数キロ進んだだけで中止した経緯があった。

林道上の最後の民家から10キロ近く走った所に、何の目的で作ったか解らない、立派なログハウスが少し前まで建っていたのだが、土台の鉄骨だけ残して山中は静寂そのものだった。その山域では数が少なくなった兎の足跡に誘われて、ログハウスの跡に車を止めると右手の谷から左手の山に向って明らかに兎を追っているイヌ科動物の・・・3年前に見つけた動物と同種と思われる・・・が続いていた。

絶滅論の研究者たちに私の行動は、間違い沙汰に写っているのだろう。今迄にも様々な場所で批判され、時には詐欺師扱いされた事もあった。しかし彼等の多くは“タイリクオオカミの亜種”“絶滅したのだから居ないのだ”という前提で考えて、寄せられる多くの情報に耳を傾けようとしなかった。あたかも、そうする事が科学的見地に立った真っ当な研究者である！と言わんばかりに。

無視され埋もれかけた多くの情報が、時を経て私の下に集まって来た。その一つ一つに耳を傾け現地まで足を運んでみると、全てとは云わなくとも生存に繋がるものが少なからず含まれているし、今なら未だ間に合うのではないかと・・・

雪上のイヌ科動物の足跡を追いながら、今までの様々な事例と重ね合わせていると、一緒に追っていた内田氏が、フト独り言を洩らしていた。

「甥っ子が毛皮の事を長瀬の博物館に連絡した時、直ぐ来ていれば三峰に納める事にはならなかったんだ！」---内田家に有ったニホンオオカミの毛皮の事を、今から10年位前連絡した事があったのに、そんなもの有る筈無いとの先入観で県立自然史博物館からは無しのつぶてだった。新聞報道されてから、慌てて人を介して来られても今更-----内田氏は

そんな事を考えているに違いなかった。

第二次世界大戦で壊滅的に破壊されたベルリンの、そのフンボルト大学に奇跡的に保存されていた頭骨3点。書簡上では日本からドイツに送られている事を多くの人達は知っていたが、誰もが戦争の激しさから無い物と諦めていた。しかし私達は有るかもしれないと考え博物館とコンタクトを取った結果、頭骨3点の他毛皮と全身骨格の存在まで確認する事ができた。

帰国後フンボルト大学の標本の写真全てを、今泉博士に送り、所見を伺ったのであるが、戴いた所見の最後に、「以前、他の動物の調査でフンボルト大学を訪れたのだが、ニホンオオカミの標本は焼失したと思い込んでいた為、脳裏から浮かぶ事さえ無かった。調査の機会が有ったのに、自ら放棄した事は、研究者として大変残念な事である」・・・そんな思いがけない文面が認められていた。

西表ヤマネコの情報が寄せられているのに、飼い猫が野生化したと思い込み、後悔の念に苛まれた博士の話を知った事のある私は、内田氏の呟きを聞きながら博士の二つの話と重ね合わせていた。

標本発掘と生存の証明は違う問題と云えるかも知れないが、内田氏の独り言を聞きながら、私は今迄の道のりが遠回りであっても、間違っ

筆者注 [ニホンオオカミ探訪記、オカタの山の神、秩父の民家に残されたニホンオオカミの毛皮]は、2004年6月に神奈川県南足柄市で行なわれたフォーラムの際刊行された「伝承と科学」に掲載された文面です。雲取林道ごもっとも様の日、はフォーラムのレジュメに掲載致しました。



ベルリンのフンボルト大学所蔵
国内外6例目の毛皮標本



フンボルト大学の標本は毛皮、
頭骨、全身骨格全てを備えている



伝承と科学

神犬産立

国会議事堂内『板垣退助翁』の作者としてその名を馳せる北村西望(1884~1987)。しかし西望の名を広く世間に知らしめたその作品は、原爆被災の地、長崎市の「平和祈念像」で有る事は言うまでも無い。その背には、西望自筆の文字が刻み込まれている。自らがそこに込めた思い・・・

『「山の如き聖哲
それは逞しい男性の健康美
全長三十二尺余
右手は原爆を示し左は平和を
顔は戦争犠牲者の冥福を祈る
時に仏、時に神」』

その思いは、1945年(昭和20年)3月から約3年間、是人種を超越した人間埼玉県秩父郡樋口村矢那瀬(長瀬町)の無住の寺であった高德寺に疎開した事と、深く通じる物が有ったのだろうか。

平成16年2月中旬、疎開先に程近い宝登山神社参集殿にて、西望の作品展が開かれていたが、100点近い彫刻、書画の中にその作品は含まれていなかった。

埼玉県の最深部大滝村の三峰神社にその作品が残されている事は、余程の西望研究者以外、一般的には知られて居らない。

作品名を『神犬産立』と言う。神犬即ちニホンオオカミの出産、をモチーフにした作品なのだ。

稲荷神社の御眷属がきつね、春日神社の御眷属が鹿である様に三峰神社の御眷属はヤマイヌ(ニホンオオカミ)である。普通の神社の境内に狛犬が有る様に、三峰神社の境内には非常に多くのオイヌサマの像が置かれている。その像は殆んど全てが講からの贈り物で、年代、製作者等に依って微妙に違って居るのが判る。牡牝一対で据えられているのだが、耳の垂れている像、尾が巻いている像、異様に尻尾が長い像等千差万別で、二つとして同じ物は無い。しかし荒川沿いに有る十数社の、御眷属がニホンオオカミの神社を尋ねると、同じ像が有るのに気が付く事が有る。同じ講社が同じ作者に制作を依頼したのか、と考えるのだが定かではない。作者は山人達からその概要を聞き、自分のイメージを重ねて制作したのだろうが、為るほどと頷く像も有れば、首を傾げたくなる像も少なくは無い。



北村西望作 神犬産立

神犬産立が描くニホンオオカミ像。私を知る限り、その生態に一番近いのがこの作品では無いかと思うのである。昭和30年代の初め、西望が三峰神社に宿泊の折、神社のすぐ下、神領三峰集落から手伝いに来ていた蒲団敷きの老人から、鬼気迫るヤマイヌ

の出産時の話を聞き及び、創作した作品が『神犬産立』なのである。

三峰より国境稜線を越える事はるか！都下御岳神社の畠山重忠騎乗馬像は、山門に有る為否が応でも参拝者の目に触れる機会が多く、善男善女に知られる処で有るが、その制作の依頼を後回しにして自らが作出したのである。神領三峰の老人の話が余りにも強烈だったのか、もしかしてその晩ヤマイヌ達の咆哮を耳にした



御嶽神社の畠山重忠像

のか、思いの丈を全て注いで制作に取り掛かったのだと言う。今、神社の宿坊興雲閣の横、休み処小教院の壁に立て掛けられているが気が付く人は多くない。

長い間ニホンオオカミに関する聞き取り調査を続けていると、三峯近辺で生存に繋がる情報が多いのに気付く。

私の自宅の斜め前に住む、黒沢正氏は昭和11年生まれでもうすぐ70歳。大滝村大血川集落出身で山の生活から離れる事50数年。黒沢家の跡取り息子だったが、当時山での現金収入は全く見込めなかった為、都会の生活に慣れてと云うより態の良い口減らしで大血川を離れる事となった。炭焼き等の山仕事をしながら8人の子供たちを育てあげた父半造氏の思い出話をしつつ、私に半世紀以上前の遠い昔話を聞かせてくれた。

荒川の支流大血川は白岩山(1921m)付近から派生する長沢背稜を源流に、大きな川ではないが妙法ヶ岳(1329m)と熊倉山(1426m)に東西を挟まれて、急峻な流れを産んでいる。狭い谷底に張り付く様に集落があり、集落の名も川の名も大血川である。秩父十三霊場の一つであり、東国の女人高野山と称された太陽寺が賑わいを見せていた頃は、さもいかばかりかと思うのだが。確かに戦後の復興時、木材の切り出しで近郷近在から人が集まり山は賑わった。しかしその賑わいも長くは続かなかった。そして今外材の輸入に押されて活気を失った国内の林業。大滝村の山人達も子孫の為に自らに言い聞かせ、息を潜めてじっと耐え忍んでいる。大血川集落も太陽寺も昔の勢いを偲ぶ事はおろか、集落の存亡さえ覚束無いと言えるかも知れない。

近い将来訪れるであろう市町村合併の際、大滝村で市議会議員が一人選出出来るのであろうかと、真剣に心配する集落の区長が居た。1000人ちょっとの人口では秩父市に合併されたらそれも難しい。いっその事一人一票ではなしに、ポイント制にする。例えば二十歳の有権者は20ポイント、百歳の有権者に100ポイントを与える制度にすれば何とか市議会議員を出せて、村の意見も議会に反映できるんだが・・・と。現役の村会議員はもっと深刻で、いっその事人間よりはるかに多い猿にも選挙権を与える事は出来ないものか！同じ地域で生き長らえている同じ類人猿なんだから・・・と半ばヤケクソで話すのである。

大血川集落の殆ど全ては、川の右岸に存在する為、家の玄関を出れば目の前に三峰神社の奥の院に当たる妙法ヶ岳(1329M)が見える事になる。

生涯の殆ど全てを大血川から離れることなく、家と山との往復が人生そのものだった山人半造氏は、殊更美しい月夜の晩になると、妙法ヶ岳を眺めながら息子達に、「今日は

啼くかも知れないから聞いてろ！」と良く言ったとの事。啼くのは勿論、学説では絶滅したとされているニホンオオカミである。不思議と良く当たる父半造氏の予言を弟の徳次氏と共に何度と無く耳にした正氏は、ニホンオオカミと犬との鳴き声の違いを、眼を瞑りながら、記憶の底から蘇えらせてくれた。

大血川集落出身の黒沢正氏が、生家の目の前に聳える妙法ヶ岳から、月夜の晩に聞こえる咆哮を聞き入っていた丁度その頃、三峰神社本殿から少し離れた三峰山頂（1101m）には、靈氣溢れる深山には全く相応しくない、現在としては有ってはならない物が存在していた。第二次世界大戦の最中の事で、その備えの為の監視台である。

雲取山（2017m）の付近は飛行機の航路になって居るのだろう。1996年の秋、「ニホンオオカミ誘い出し」なるイベントを大洞川上流で行った事がある。縄張り意識の強いオオカミの事だから、タイリクオオカミの遠吠えをテープで流せば、それに反応して咆哮が返って来るはず！そんな発想からだったのだが、収録出来たのは航空音だけだった。偶然の遭遇を期待するフィールドワーク主体で、頭骨の見方さえ知らず、タイプ標本の存在理由も意に介さなかった頃の、私の一ページである。

秩父郡荒川村在住の千島久幸氏は大正15年生まれ。荒川村に移る前は生まれた大滝村強石で長い間暮らしていた。ケーブル駅の近く、三峰山頂に神社の建物が有り、その上に監視台を作り、激しくなった戦争の備えの為、1班8人、5～6班交替で、24時間張り付いての監視に、当時青年学校に通っていた千島久幸氏も加わっていた。夜の監視に立つと、周りの山から・・・あるときは和名倉山の方面から、あるいは妙法ヶ岳方面から、腹の底から響くような、地響きがするような・・・明らかに犬の遠吠えとは違う咆哮を、幾度と無く聞いていた。監視に立った50人以上の人たち全てが例外無く耳にし、耳にした全ての人が、ニホンオオカミの遠吠えである事を疑わなかった。大都会に住む学者、知識人が、ニホンオオカミの絶滅をしたり顔で語っていた頃、埼玉県 deepest 三峰山頂の、夜の監視に立つ、名も無き若者たちは当たり前のように、生きているニホンオオカミの咆哮を聞いていた。文明から置き忘れられた様な山里では有ったが、培われた文化は細々であっても、親から子へ、子から孫へと、延々と伝えられてきた中で、一コマで有った。

千島久幸氏は同じ三峰山中で同じ頃、もっと不思議な経験をしている。戦争が激しくなった昭和17～8年の夏、警戒警報が発令され半鐘が鳴った為、真夜中では有ったがカーバイトのカンテラを頼りに、麓から山頂の監視台まで歩く羽目に陥った。

日中ならロープウェイに乗って苦も無く行ける訳だが、真夜中であっても非常事態の事で、一人神社への参道を登って行った。

ロープウェイ山麓駅を過ぎ暫くすると、清浄の滝が懸かっているが、そこまでは広く整備され月の明かりも手伝って、難なく歩く事が出来た。滝に架かった橋を渡ると、途端に道幅が狭くなり、参道として整備されてはいても鬱蒼とした林の中を歩く状態で、道の左右は熊笹が山頂まで続いていた。千島氏が異変に気がついたのは、滝を越えて間もなくだった。千島氏の後を追うがごとく、歩く度熊笹の中を何かがガサガサと音を立てて付いてきて、歩を休めると音は止み、歩き始めると再び音も始まる。風も無いのに不

思議な事だと思っていたのも、道半ばの薬師堂位までで、それを過ぎ山頂までは恐怖との闘いだった。山頂まで10分位の所に位置する、代々の宮司宅である宮沢、広瀬家に余程逃げ込もうと考えたが、それも思いとどまってどうにか監視台まで辿りつき、事の仔細を神社に勤めている仲間の監視員に話すと、「送りオオカミ」だと教えてくれたと言う。

その話を伺いに出向いた暑い夏のある日、話す千島氏の横で私と共に耳を傾けていた氏の奥さんは、連れ添った長い生活の中、繰り返し繰り返し聞かされていた話の注釈を、まるで当事者の様に、時々氏から話を奪って私に聞かせてくれた。

話が終わってから奥さんが一言ポツリと呟いた。「平々凡々な80年のお父さんの人生！この事だけは余程のことだったんでしょうね！」・・・と。

三峰山南面に観光道路が通じ、社会の流れが車社会となってからは、あれ程賑わったロープウェイもその運行に支障をきたす様になった。ましてロープウェイ開通以前、神社への参拝者が列を成した表参道は、目的無しで利用する者など、殆どと言って良いくらい居ないに等しい。ニホンオオカミ研究の仲間である、大滝村強石在住の吉田泰邦氏も、60数年の人生で往復、参道を使った事は無いと言う。私が初めて歩いて登ったのは、20年以上前の5月の連休、長だの列でいつ乗れるか判らないロープウェイで神社に行くより、逸れの方が早いと知ったからで、もしかして子供たちには初めての自然との触れ合いだったかも知れない。

さいたま市見沼区南中丸在住の須田真明氏は昭和12年生まれの66歳。地方公務員を定年まで勤め、現在悠々自適の生活を送って居るところである。東京都立川市生まれの須田氏は、中学時代から兄に連れられて、奥多摩の山々を歩くうちその魅力に引かれ、東京農業大学入学後ワンダーフォーゲル部に入部し、国内の多くの山々と親しんで来た。須田氏にとって三峰神社参道～奥の院である妙法ヶ岳のコースは、云わばトレーニングコースの内の一つで、折り有る事に使用していた。自宅～大宮駅～熊谷駅～三峰口。そしてバス利用で登り口の大輪まで辿りつけば、四季折々の観賞に値する、知り尽くした山道である。

平成9年12月初め・・・いつもの様に自宅を出発し、いつもの様に大輪のバス停で身支度をし荷を背中に負うと、須田氏は1時間半後に神社の境内に到着していた。

12月ともなれば境内にある数件の茶店も開店休業状態で、その茶店を横目に妙法ヶ岳へと歩を進めて、1時間後に霧藻ヶ峰への分岐地点の先にあるベンチで少し遅めの昼食、インスタントラーメンを作って一息ついた。いつもと同じ時間の流れの中、奥の院、妙法ヶ岳の社に参拝すると、日が傾き始めた初冬の山道を下り始めた。

何が！と言う程の物では無かったが、実を言うと奥の院参拝後あたりからいつもと違う・・・無理に言うなら 気配というか・・・そんな物を感じたのだが、60年の人生の中で初めての事でもあり、気のせい！と思い直して この近辺の山の感触を独り占めする喜びと、落葉で広くなった空を眺めながら、来た道を下って行った。

神社から表参道を30分位下ったところ、薬師堂跡に休憩所が有る。

いつものように須田氏は、薬師堂のベンチに腰を下ろすと、先程登った奥の院妙法ヶ岳の岩肌を眺めながら、タバコをふかし始めた。満月が青白く山の上に懸かり、墨絵の世界に居るような錯覚を覚えさせ、タバコの本数が2本から3本に移る・・・そんな至福の時間を過ごしている時だった。

妙法ヶ岳の方角から”うお~~ん うお~~ん”と2～3声、物悲しく遠吠えが聞こえて

きた。眺めている景色と余りにもマッチした鳴き声だった為、出来すぎの感がして我が耳を疑った時、再び同じ方向から同じ鳴き声が聞こえてきた。遠くからの鳴き声だった為、全く怖さを感じる事は無かったが、先程山上で感じた気配はもしかしてこれだったのか・・・と。時計を覗くと針は5時を指していた。墨絵の世界から抜け出るには惜しい気もしたが、バスの時間が気になりだした須田氏は、後ろ髪引かれる思いで薬師堂を後にする事にした。

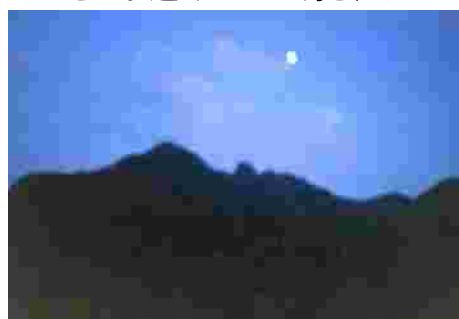
翌年の11月末、私たちはマスコミの取材も手伝って、薬師堂跡でキャンプを張った。

イヌ科動物の咆哮収録を試みたのだが、2泊3日の短期間の為か、たまたまタイミングが合わなかった為か、はたまた大勢の人達が発する熱気の為か、野生からのメッセージは何も無かった。

2005 年 春



三峯神社表参道薬師堂跡



咆哮が始まって間も無い妙法ヶ岳の月



須田氏は薬師堂跡で長い時間咆哮を聞いていた。

終わった時に奥の院は朧気だった。

ニホンオオカミの分類的位置付け

ある生物の種や亜種の命名の根拠となる標本を“タイプ標本”と呼ぶ。その標本には採集者、採集地、和名（日本の場合）、採集年月日、標本番号などを記すことになっている。これが分類学のルールである。

私たちが通常ニホンオオカミ（*Canis hodophilax*）と呼ぶ動物のタイプ標本は、オランダのライデン自然史博物館にある。剥製1例と全身骨格つきの頭骨1例を含む全3例の頭骨標本である。これらの標本をもたらししたのは、江戸時代末期、西洋医学の普及に努めたドイツ人医師のシーボルトである。

そして“ニホンオオカミ”を新種とし、“*Canis hodophilax*”と命名したのはライデン自然史博物館の初代館長テミンクである。学名の“*Canis hodophilax*”に、オオカミの亜種であることを示す“*Lupus*”が無い事は、テミンクがこれをオオカミではない新しいイヌ科の哺乳類としたことを物語っている。

しかし、頭骨3例全てが、後世の研究者達において、同じ認識に置かれているかと言えば、そうではない。通称“頭骨A”は多くの点で、ニホンオオカミ的特徴を有していないため、“イヌ”と考えるのが一般的になっている。3例のタイプ標本に2種類の動物が混じっていると云う事なのである。正しい分類をする為に、裏付けとなる科学的実証をしなければいけないのであるが、まだ結論を得ていないのが現状である。

国内でのニホンオオカミ研究史に目を転じた時、初期の研究者達とテミンク等の認識とに、大きなズレがある事に気がつく。斉藤弘吉氏を始めとする多くは、自らの描くニホンオオカミ像を研究の出発点としたため、科学的見地に立った分類は次の世代への課題となり、混迷が混迷を呼び、一部は現在へと続いている。

しかし、ここ10数年の間に、毛皮を含む多くの標本が、新しく見つけれられる事となり、次第に真実の解明へと向かっている。

帯広畜産大学の石黒助教授によって2002年9月に発表された、遺伝子レベルでのニホンオオカミの分類的位置付けもその一つと云える。

2002年9月29日付け、今泉吉典博士の八木宛私信

表題のヤマイヌはニホンオオカミの事ですから、その方が良ければその様に訂正願います。ニホンオオカミと云う名はどうもオオカミの亜種と云う印象が強いので、止めたいと思っていた為こうなりましたが、現在ではニホンオオカミの方が通用していますので・・・

が、哺乳動物の世界で当然の如く論じられるのは、そう遠い事でないのかも知れない。

参考文献

新潮社刊シンラ 山根一真「動物事件簿」第14～17回

明治の初め、日本では、イヌ以外の野生犬は全て狼（ヤマイヌ）で、本当の狼は千島の北の方にしかいないと信じられていた。この問題を論じたのが、東京大学教授の D.Brauns (Chrysanthemum. vol. 1, pp. 66~67, 1881) である。

彼は北海道の頭胴長 1200mm のヤマイヌ *Canis hodophilax* の体高（肩の高さ）が 600mm しかないのに、ヨーロッパ産のオオカミ *Canis lupus* の頭胴長が同じ（1200mm）でも体高が 780mm もある事を知った。

哺乳類の同一種の頭胴長は、寒冷な地方の個体群ほどおおきくなる。（ベルクマンの法則）しかし、体高も同じ率で大きくなるので、体形は一定不変である。

ところがヤマイヌとオオカミでは体形が異なるのである。これは、多分別種だからだと Brauns は考えたが、この考え方は今見ても妥当であった。

ヤマイヌは九州、四国、本州、北海道に同一種が分布することになるが、これはおかしいのではないかと考える人があるかも知れない。日本本土と北海道の哺乳類は種が違うのが普通である。ホンドキツネとキタキツネ、キテンとクロテン、ホンドリスとエゾリス等々、とても書ききれないほど沢山ある。この様な分類の境界線として津軽海峡がブラキストン線として有名になった。

しかし、ごく少数だがブラキストン線を越えて両地域に同一種が分布する場合がある。ヒメネズミ、ジネズミ、タヌキ等であるが、これらはブラキストン線がまだ完成していなかった古い時代、おそらく鮮新世（180~530 万年前）にアジア大陸から日本に渡来し、急速に国内に分布を広げたものであろう。

ヤマイヌも多分同じ頃渡来したのである。オオカミがまだ現れなかった時代である。オオカミがヨーロッパに現れたのは約 80 万年前（更新世中期）で、そこから東進して北アメリカへ約 40 万年前に入ったと云われている。何れにしても鮮新世にはいなかったようであるから、ヤマイヌの仲間に四肢の長い弟妹が突然現れ、長脚の長所を生かして急速に仲間を増し栄えたのがオオカミであろう。

現生ネコ族 *Felini* が、中新世末以来、急速に栄えたのは、中手・中足骨が突然長くなった為だと云われているが、オオカミの場合は、前・後肢全体が突然長くなったのであろう。

オオカミが、アジア全体に分布を広げた際、北海道へも当然侵入しようとしたに違いない。が、ヤマイヌがいたので出来なかった。いや、少しは入っていたのだ。その証拠が Pocock (1935) の巨大なエゾオオカミ *Canis lupus rex* かも知れない。

Brauns が調べた頭胴長 1200mm のヤマイヌは頭骨長が、なんと 285mm も有ったと云う。これでは *Canis lupus rex* の 274mm より、もっと大きい事になるが、大きいからオオカミだとは云えない。

「ヤマイヌは異常に頭が大きいグロテスクな怪物だった」（Brauns）と云われる。沼田荷舟氏筆の『北海道産狼の図』（平岩米吉著、狼、1981、P. 241）の死後の狼の頭は

多少オーバーだろうが、その傾向をよく現している。

絶滅に瀕した動物は多様化するのだろうか。謎は深まるばかりである。

筆者注 「ニホンオオカミの分類的位置付け」は平成 14 年秋、三峯神社興雲閣にて行なわれたフォーラムのレジュメに掲載されました。

今泉吉典博士の「奇怪なる私のヤマイヌ」は、その際私が無理にお願いし、寄稿して戴いたものです。

恐らく今泉博士最後の文面だったと思います。



今泉先生追悼抄

2007.6.07.読売新聞

あとがきにかえて

人間長い事生きてると、いろいろな事が起きるものである。
意図して起きたこと。偶然の流れのなかでおきた事。様々である。
私が山との関わりを持つようになったのは、歩き始めてそれほど経っては居なかったかもしれない。

5人兄弟の末っ子だった私は母が忙しかったせいもあり、隣の家のはあちゃんにかまってもらっていた。ばあちゃんの名前は畔上マツノと言った。となりの家は歩いて約一時間のところの山の畑を耕作しており、手を引かれてよく畑につれていってもらった。畑のなかに巢食ったひばりの卵を飲んだり、蛇を捕まえて振り回して見たり……。あるとき隼に食われたというウサギの頭なしの死体を目の前で捌いて、帽子にするのを眺めたり……。そんななかで一番印象深かったのは、マツノばあちゃんが『筒マムシを見た』とよく言っていたことだった。子供の私には何の事だかさっぱりわからないようでも、感じとしてはなんとなく理解できた。マムシが筒のようになっている姿を想像するだけで良かったのだから。後に槌の子の事らしい？と思えてきたのだが……。

テレビの無かった時代と言うのは映画が娯楽の花形で、看板が街角ごとに立てかけられていた。“ばあちゃんなんて書いてあるの？” “わからないよ！” “こんな大きい字なのになんでわからないの？” “ばあちゃん、学校に行っていないから字が読めないんだよ！”

こんな会話を交わした事を、半世紀以上経った今でもはっきり覚えている。学問が無くても、正直な人間だった。そんなばあちゃんに可愛がられた私だが、生きる為とは言え今まで多くの嘘も撞いてきた。しかし、信頼関係を築いているニホンオオカミ研究の仲間の不文律として、“サイエンスの中で嘘はタブー”というルール作りをし忠実に其れを守ってきた。

私が住む上尾市で一番大きな会社かもしれないN社のトップまで上り詰めようとした、T、と言う人物が居る。私と同じようにニホンオオカミの研究をしている。10年近く前、奈良県東吉野村で行われたニホンオオカミを含む野生動物のフォーラムが最初の出会いだったが、初めから異質のものを感じていた。端的に言うならば知ったかぶりをするのである。

ある機関紙の記述をめぐって、些細な事だったのだがやりあった事がある。それを根に持ったのか、私たちとしては絶対許すことができない“サイエンスの中で嘘はタブー”を犯してきた。

自分で『奥秩父山系幻のニホンオオカミの生存を求めて50年』と言う小冊子まで作って、その中で堂々と！

かいつまんで説明すると、私が写真撮影した秩父野犬をTはNと言う友人と1996年5月に同じ山域で見た。写真には撮れなかったが、全く同一の動物であった。「秩父野犬」はあの付近に定住している、何故か？首輪の跡が有る。太っている。人を恐れない。云々。そして末尾近くにこう記してあった。撮影地点より若干下流の谷は狼窪と呼

ばれ、大正閣の裏には狼岩もあり、狼が生存したと考えられます。5月には奈良で第3回フォーラムがあります。是非参加され貴重な体験を発表される様期待して居ります。

私はT氏の文章を“嘘だ”と直感的に感じた。現地に大正閣は無いし狼窪の位置も私の認識とは違っている。誰かから聞いた話で、現場を良く知らないで書いている！大正閣では無く大松閣なのだ！

真実はすぐ明らかになった。現場近くの溪流釣堀の責任者である小沢氏からの話を、私への意趣返しにかでっち上げたのであった。「秩父野犬」の目撃談は地元の猟師柿沼氏の目撃談であったし、小沢氏への礼状



T氏が出版した小冊子

には聞いた事は内緒にして欲しい旨の文面も加えられていた。

そして奈良県の大台ヶ原での彼らの集まりにては、参加者にそのコピーを配っている。そのコピーが巡り巡って有識者の手に渡り、間違った判断材料になっていたとしたら・・・。

昭和9年6月創刊の動物文学、平成9年初夏、狼特集号の21頁下段に“根拠に欠ける残存説を蒸し返し、専門家の中にも巻き込まれる人が出てきていて、それらが興味本位にマスコミに取り上げられ、もはや正しい研究のため黙視できない状況まで来てしまった・・・。”の記述がある。

私は上記筆者との面識がある訳ではないので、断言した言い方はできないが、各方面での当時の筆者の口調等から察すると、充分その可能性があると言わざるを得ない。そして私は、筆者の知人でもある大阪府在住の古代犬研究家I氏から、詐欺呼ばわりに近い言い方もされている。T氏にしてみたらそれで充分目的が達せられたのかも知れないが、人間として、同じニホンオオカミの研究者として、“如何なものか”とを感じるのは私だけではない筈である。

1995年11月に三峰神社で開かれたニホンオオカミフォーラムは、奈良県天理市のニホンオオカミ研究会が主催で、入間市在住の大場烈夫氏と私が現地での運営を引き受けての開催だった。開催当日までの流れの中で、大会会長である天理市のN氏がラジオ番組の中で、“ニホンオオカミの生存は信じるが、タイリクオオカミを森林生態系維持の為放さざるを得ない”と云ってしまった。ご本人にとって違和感のある発言では無かったのだろうが、事務局の私は何も聞かされていなかったし、数日間はその対応で大変な思いをさせられた。

鹿が増えすぎた為、森林生態系に悪影響を及ぼしている。タイリクオオカミを放して鹿の数量制限をすべきだ！と言う事だったのであるが、それでは日本の生態系はどうなってもいいのか？との意見が連日のように私の元へ届けられたのである。すぐさまN氏の下に現状を報告し、その種の話はフォーラム終了まで止めて貰うようお願いがいった。フォーラムは成功裏のうちに幕を閉じる事ができたのであるが、N氏とはそれで交流を断ってしまった。

例え話として適切でないかも知れないが、“自分の奥さんが病気で、妻としての務めが出来ないからと言って、若い女性を家に入れたらどうなるか・・・？”其れと同じような事だと私は考えている。N氏と袂を分かってから私は、同じ目的を持つ近隣の研究者達と一緒に生存の証明をするべく活動を続けたのであるが、結果としては多くの者が同床異夢である事が判っただけだった。

ひどいものになると私たちの持つ情報をリークする為だけに集まってきたのか？と思われる者も居たのである。愚かな私は、T氏の小冊子を手にするまで気付かずに信じていた。経験ある方ならお判り頂けると思うが、信じてきた仲間の裏切り行為に遭うことは、予想以上にダメージが大きいものである。それ以後私は多くの仲間との交流を避け、互いが理解できる者数人とで、密かにと言える範囲での活動に留めている。

実を言うと集まってくる生存に関する情報を、手分けして探索すれば、より速く確認作業が出来るものと考えてるので有るが、上記の理由等で差し控えている。現在多くのエネルギーを掛けて活動している場所に、悪意を持った人達が来ては困るし、悪意がなくとも全ての人間が善人ではありえないのである。多分この事を一番理解できるのは、数年前九州でニホンオオカミと思われる動物の写真撮影をされた、福岡県在住の西田智氏だと思う。西田氏も私同様、いわれの無い疑いを掛けられ、これでもか！と言うほどたたかれた経験を持ち、私の痛みを充分すぎるほど分かっているのである。

T氏が上記の小冊子を出した時の肩書きは、ニホンオオカミ研究会本部名誉会長であり、発行者は同会会長のN氏、今現在二人がどのような関係でいるか私には知る由も無いが、『ニホンオオカミの生存は信じるが、森林生態系維持の為、増えすぎた鹿の数量コントロールの必要上、大陸オオカミを放さざるを得ない。』の持論を二人とも公にしているのである。これだけ大きな矛盾を抱えた理論を振りかざすのではなく、『ニホンオオカミの生存を信じるから大陸オオカミを放すのは反対。』『ニホンオオカミは絶滅しているのだから、大陸オオカミを放さざるをえない。』どちらかの理論構築ができないのだろうか？

私には到底理解できない世界である。

2003 年 春

筆者注 以前、書き溜めた文面を出版してはどうか、と云うお話を戴いた際、“あとがきにかえて“の内容はどんなものか、と、編集者からお叱りを受けた事があった。文面で指摘した人達と私が同じレベルになるから、との理由だったと記憶している。確かにそうかも知れないし、私がもっと大人になれば良いのかも知れない。しかし10年以上経った現在でも、T氏の行動だけはどうしても許せないのだ。過去に於いて考古学、医学の世界では、もっと大きな事例で騒がれた事も承知している。ここに掲載し、読んだ方から編集者同様の指摘を受けるかも知れない。それら全て承知の中で提示した事を、御理解願えれば幸いだと考える次第である。

2013 年 初夏

八木 博の プロフィール

1949 年 11 月、新潟県魚沼市（旧堀の内町）生まれ。



17 歳の春、浅草岳

この数年前猟師浅井利友氏は仲間 3 人で獲って食べている。
フォーラム「獲って食べた」参照

1969 年 7 月 29 日深夜、小屋番をしていた苗場山中でオオカミの咆哮を聞く。



苗場山頂（2145mm）旧遊仙閣
この小屋の最後の番人だった

1995 年 11 月、三峰神社興雲閣にてニホンオオカミフォーラム開催。



1995 三峯フォーラム
右後端はジョン・ポール・ナイト (英)

1996 年 10 月 14 日、秩父山中でニホンオオカミとしか考えられない動物の写真撮影に成功する。

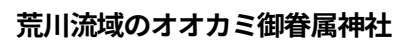


秩父野犬
1996.10.14.撮影

1997 年 4 月、ベルリンのフンボルト大学に所蔵されていた毛皮標本を再発見する。
大場烈夫、井上百合子との 3 人のチームで成した業で国内外 6 例目の
標本。機関誌 C A N I S に発表。

2002 年 1 月、5 月と相次いで秩父市内の民家に所蔵されていたニホンオオカミの毛皮標本を発見。機関誌 C A N I S に発表。

11月、三峰神社興雲閣にてニホンオオカミフォーラム開催。



2010 年 NPO 法人ニホンオオカミを探す会設立

42